

台湾東海岸卑南遺跡発掘報告*

金 関 丈 夫 ・ 国 分 直 一

Researches on a Prehistoric Site Near Peinan, Formosa

By

Takeo KANASEKI and Naoichi KOKUBU

In January of 1945 the present authors made an excavation of a site of a village presumably ruined by a flood in a certain prehistoric time, and known for the stone pillars, and stone walls as a megalithic site near Peinan (卑南), E. Formosa, under the menace of machine-gunning of the U. S. airplanes. The house with stone walls, stone pillars and subterranean stone floor of a plan of about 15m × 4.3m together with many remains containing a tripod pottery, whose surface was decorated with reddish iron oxide, many legs of tripod pottery without pigmentation, small earthen wares inferred to be some sacred vessels, an armband of black earthen ware, stone knives and stone pestles aroused our interest. Among these the coarse, reddish pots with ear shape handles horizontally attached, the small type vessels and the stone pestles appear to be related with those of the Ami people's recent usage. They use the same type small vessels called "Dewas" as those for offering wine to their Gods.

東海岸台東街の西方，卑南社の西北方にある立石を有する遺跡については若干の報告があり，旅行者の中にはこの遺跡を訪ねているものもある。然しこの遺跡の性質は決して明瞭にされてはいなかつた。ただ従来報告の中では鹿野忠雄博士の「台湾東海岸巨石文化遺跡に就いて」は最もよくまとまつたもので，博士はこの報文中に於いて住居の遺構であろうとする推定を示している。然しながらそれは発掘によらぬ表面的な観察による推定であつたので，我々は発掘を行い，その実態を明らかにしたいと考えた。更に遺跡遺物を通して東海岸及び南部台湾の先史文化との関係を考えたい。然し当時太平洋戦争末期にして，間断なき空襲を受けていたため十分におちついて完全な発掘が出来なかつたことは遺憾であつた。それにもかかわらず，我々はその不十分な作業を通してでも，ある程度所期の目的を達することが出来たと思つている。

以下遺跡地方の概観，研究史，発掘の経過，遺構，遺物についての観察，その文化系統等にわたつて記述を行いたい。

* 水産講習所研究業績第247号，1957年7月25日 受理

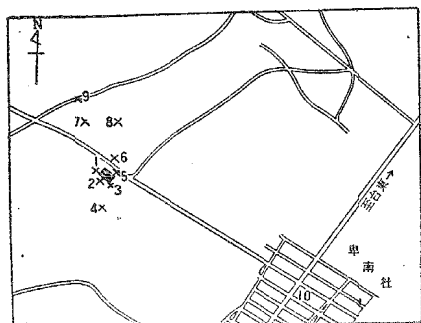


Fig. 1. Map of the prehistoric sites rear Pei-nan village.

- Farm house
- 1. The site excavated
- 2. A small subterranean room of piled slates
- 3. A site with piled slates
- 4—8. Sites with stone pillars
- 9. A site with reddish brown potsherds

の区域を有する遺跡である。石柱遺構を明瞭にとどめているものは発掘せる遺構を合して6ヶ所、柱数の多い場所ではその配列が長方形のプランをなしているのが認められた。遺跡中にスレート層の残跡もあり、スレートの石室も見られ、又遺跡地区北端には表土下30cmの地下に赤褐色粗面の豊富な土器包含層のあることも判明した。なお遺跡地区の西方約1500mのHinashiki山々脚をやや上つたところに石棺が発見され、附近の樹木伐切はタブーとされているとのことも、土地の人々から聞いた。卑南先史聚落に所属した墓地でなかつたろうかと推測されるが状況について確認する時間をもたなかつた。

三 研 究 史

この遺跡についての最初の紹介は、河野嘉六氏の大正3年12月序のある臨時台湾旧慣調査会第1部蕃族調査報告書第2巻、あみす族第2篇、台東庁あみす族所収の「ふゆま族の口碑伝説」を通してなされている。即ち大昔豪雨、落雷、濁浪によつてパピアン（あみす族）の村が一望の原となつたことを語るふゆま族神話が掲げられている。その際あみす族部落の旧址として立石を有する遺跡の写真2葉が掲げられている。その1葉はあみす族の始祖の一であるリワイラビンの子孫が住みたる家の柱が石となつたとする伝説を伴うものとして紹介され、他の一葉は「同上あみす部落ノ旧址ハ今耕地トナレルモ所謂柱ノ四囲ハ鉄ヲ入レス柱ノ地上ニ立チ数ヘラルモノ七・八箇総テ上方ニ穴ヲ穿テリ」と解説されている。その後この遺跡について注目すべき報告を書いたのは鹿野忠雄博士である。博士は1928年4月及び1929年5、6、7月と数度この遺跡を踏査している。博士はこの遺跡について次のように述べている。

此一帯の畑中にはスレートで出来たメンヒル様の立石が数多遺つている。其の最大なるは一丈五尺に及び又二間、小なるもの一間位のものも数多ある。其の中には傾きたるもの倒れたるものが数多くあるので、其の原形をよくうかがうことが出来ないが、現在残つているものも相当あるので、昔日の大体を予想することが出来る。此処に一つ注意せねばならぬことは、この立石が長軸の方向は北東と南西であることである。又この立石の上部には孔が開いているのも注意すべきである。石質は例外なく皆粘板岩である。この粘板岩は此附近には産

二 遺跡地方地形及び石柱遺構の分布

この遺跡は台東街の西北約4kmのところであり、地形的にはやや高台を示している。

北方には台東山脈が延びて丘陵となり、東方は極めて緩やかに傾斜して卑南大溪の河原に臨んでいる。卑南大溪は直ちに海洋に接し、海洋を越えて火烧島が遠望される。遺跡は卑南社の北西方約500mを南縁としてほぼ北方に分布している。

その分布については、最も顕著な立石遺構の発掘を行つた後、空襲の断続の間を利用しての半日間の踏査によつたものであるから精確さを期しえないが、南北の方向に約400mの拡がりを示し、東西方向に約100m前後の拡がりを示している。即ち約400m×100m前後

せず二里許り隔つた大南社の方の中央山脈の山地に行かないと産しないことである。このような巨大な岩石を遠方より運んだことは明かであるが、それを運ばせるに至つた要因即ち宗教的の信仰とか乃至王朝の絶対的の権力は今日考えると驚嘆に値するものがある。

この遺跡地の所有者である卑南社の蕃人に、この遺跡に就いて尋ねると、これは旧蕃社であつて現在の立石は往時の家の柱をなしていたと伝えられているという。前述した如く、柱が一定の方向に列ぶということは蕃社の集団を意味すると考えることも出来る。彼等蕃人の語るところに仍れば、昔時はこのような立石が更に多く存在したのであつたが、大地震の爲めにその大半は倒れて僅かに現存のものが遺つているという。この附近は前述したように粟畑になり耕されていたために地下に埋没した石器類が地表に出ている。又これに土器も見ることが出来る。

博士は以上の総括的敘述のあとで立石について観察を述べているが略す。

鹿野博士の他には宮本延人氏が台湾先史時代概論（人類学先史学講座第十卷（1939）所収）中に於いて舞鶴の石柱にふれた際「相似たもので小なるものは台東庁卑南にある扁平石柱で、これも上部に人工の小孔を有している」と簡単に述べている。

卑南社北隣の遺跡地方は卑南社、馬蘭社、猴仔山社、加路蘭社等で Vunu とよばれているが、この Vunu の遺跡は「高砂族所属系統の研究」には Tsiwilian 氏族及び Rarangus 氏族と関係ある遺跡として語られている。然し同上研究によると、Tsiwilian 氏族はアミ族全体の故地 Arapanai から卑南社北隣の Vunu に移り、更に奇密社北方の Tsirangasan に行つたと雷公火社口碑に伝えられているにしても Rarangus 氏族と結びつけて語られることが多いとして Rarangus 氏族との関係に注意している。

猴仔山の Kassasikoran の石棺群は Rarangus 氏族の墓であろうと、猴仔山、加路蘭両社が伝えているが、同上研究に於いては Kassasikoran の埋葬が仰臥伴展葬にして、一般のパングツアハ族の埋葬法と一致しえないことから「Rarangus 氏族と Kassasikoran の石棺とを結びつけることが困難であり、また類似の石棺は東海岸の各地に見出されるけれどもまだ十分の調査が行われておらず、この点について何事もいい得ないのである」としているが、なお「但し諸口碑に Kassasikoran の地がこの氏族と結びつけて屢々語られていること各地に残存する石柱？石壁？または石棺？が屢々彼等の住居跡とせられていることなどは注意すべきであつて、或は巨大なる石材の使用は Rarangus 氏族と何等かの関係を有するかも知れない」と述べている。以上の研究の結果は Vunu の遺跡を遺した先住民の系統を考える上に貴重な手がかりを与えるものと考えられるので、遺構遺物についての考察をまとめた上に於いて、更に系統の問題をとりあげて考察したいと思う。

四 発掘経過

先づ発掘の経過について簡単に記載したい。昭和19年12月31日台北出発。1月2日夕刻台東着、桜旅館に投宿、杉田警務課長及び憲兵隊の馬場生知氏の配慮によつて緊迫せる空襲下なるも調査上のプランを立てる。

1月3、4日は空襲をうけて防空壕中に待機、5日はじめて卑南遺跡を訪ね、国本氏居宅裏の大石柱遺跡を見る。鹿野博士の記載に見られるように立石は長軸の方向（北東より南西に向いている）に一直線をなし、且つ立石を中心として、土器石器の散布するのが見られた。立石のプランより見て住居址なることは明瞭なるも、その実証を得るために発掘が必要である。作

業は午後1時半から4時迄、円石を敷きつめた歩道と思われる部分の一部の表土を除き歩道面の再現に努力する。赤褐色粗質土器片が敷石の間から多量に出土した。

1月6日 台東庁の好意による自動車にて遺跡に至り、午前8時より発掘を開始する。国本氏の令息に午前中作業の援助を受けた。作業は歩道の漂土漂石を除く作業を継続した上、南側の居室を発掘する。スレートの敷石と思われるものが現われた。磨製石器1例の他に土器片多数が出土した。有頸の口縁及把手が最も多く出土するが、高台を有する底部も見られる。器質は粗質のものを主体とするが良質のものも僅少なが見られる。石器には石杵、土器製作用に使用されたとと思われる扁平円石及球状のものが出土した。

1月7日、卑南社の女子青年2人夫婦として参加。表土漂石の搬出進捗する。

1月8日、女子夫婦とともに埋積表土除去作業続行、住居址北半の表土を除去、柱石の埋没状況が判明する。

1月9日、早朝より空襲、爆音の合間に、壕より出て表土の除去作業を行う。午前11時頃台東市飛行場附近に爆弾投下、大地震動する。午後少雨あり、作業を中止して卑南社を訪ねる。卑南社より帰って少雨中発掘を続行、その間、東方海上の火焼島の爆撃が行われた。大爆音を数回に互つて聞く。作業進行、次第に浅い竪穴式構造明瞭となる。

1月10日、空襲なく静に作業、住居址中央部位の発掘を行う。赤褐色土器は漂石中にはさまれて発見される。

女子夫婦午前中不参、午後参加、作業は午後にはいつてはかどり、辛うじて床面一部をつきとめることが出来た。

1月11日、女子夫婦2名の他に卑南社より男子2名の来援を受けて、中室全床面を出すことに成功。夕刻床上に於いて良質の鼎器を発見。微量の黒陶片も見られた。本日までの作業の結果側壁にスレートをを用い、中央にはほぼ方形の柱石をもつ浅い竪穴式住居の構造がほぼ明にされるに至った。

1月12日、午前、午後互つて実測及び作図を行う。

1月13日、午前中作図。

以上が発掘経過の概要であるが、空襲下であり又、いつ米軍の上陸作戦が行われるかわからないという不安な状況下であつたため辛うじて、住居址であることの実証を僅にえた上で発掘を中止せざるをえなかつた。

五 住 居 の 構 造

住居址は長さ北東より南西の方向に15m余、幅4.20m乃至4.30mのプランを有し、地表下若干の掘り下げを行つた住居と考えられるが、漂土漂石によつて埋没していることから見て洪水によつて倒壊したものと考えた。

上掲のプユマ族伝説は洪水による部落流失を説いている。「高砂族所属系統の研究」所収の卑南社口碑によると「地震に続いて火災起り蕃社壊滅して、当時の柱が石となつた」と伝えているが焼失の痕跡は発掘の結果では実証されなかつた。

住居の立地している地形を見るに、南西部位に微弱な傾斜が見られる。従つて室内床面の掘り下げ構造は北東部位に於いてやや深く、南西部位に於いてやや浅く掘り下げられていたと考えられる。南西位の支柱附近に於いて家屋長軸に直角に切つた断面構造を見ると、現状に於いては地表下床面迄1m乃至70cmの深さを示しているが、側壁内側に現地表下に約20cm厚さの変

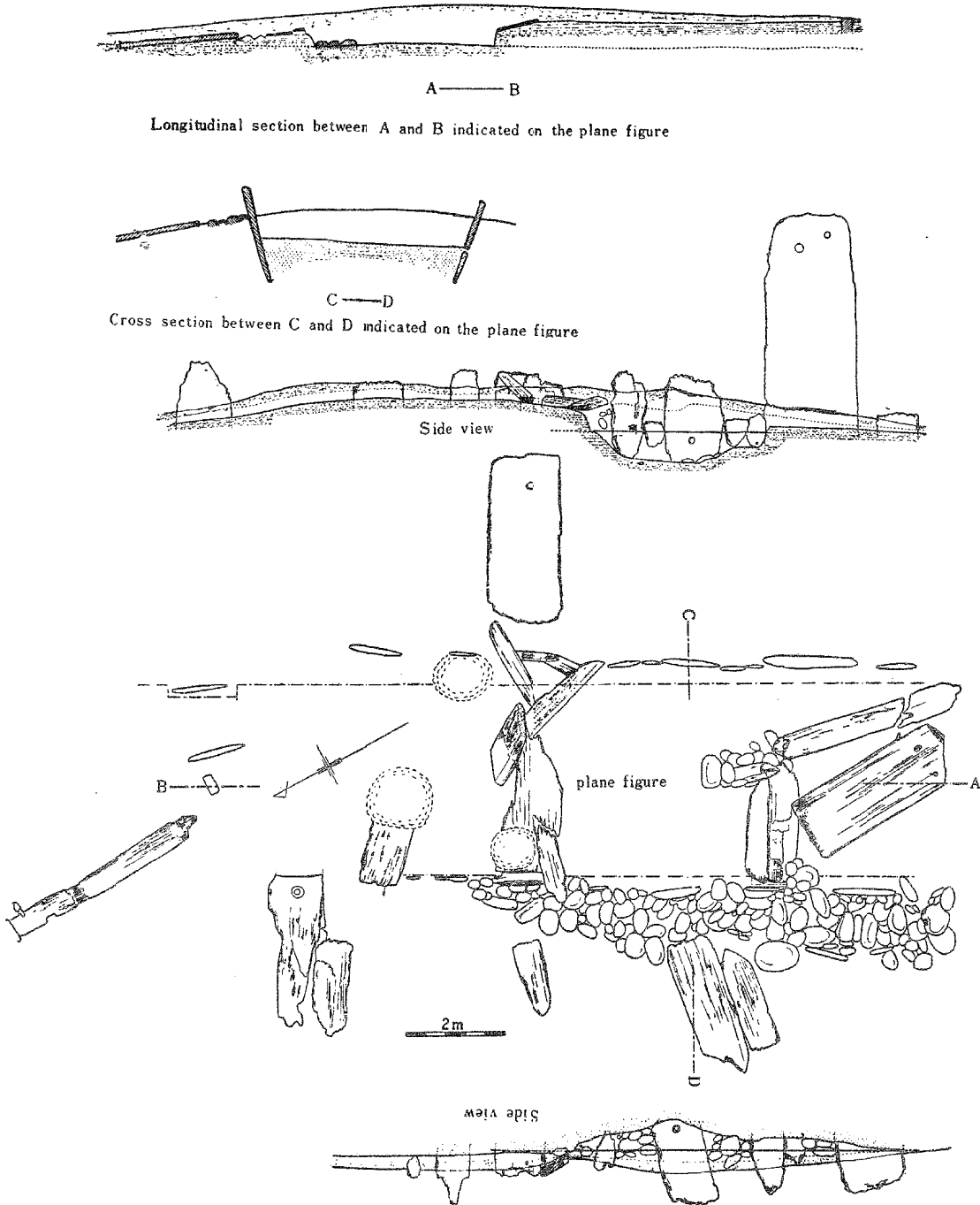


Fig. 2. Sectional views of the excavated house.

色部位が見られることよりすると、2次にわたる埋積を受けていると考えられる。従つてこれら埋積以前の掘り下げ構造の深さは問題である。上述の位置に於いて倒壊後の第1次埋積による地表から床面迄は80cm乃至50cmを示したと思われるが、それ以前の倒壊当時には地表から床面迄は更にずっと浅い構造を示したと思われる。その深さは住居西側側壁基部に沿つて布置されたと考えられる円石の構造面から見ると、中央部位から南西側の発掘せる部分に於いてはほぼ30cm前後を示していたと考えられる。上述の全容を示せる大石柱側壁には内側床面よりして3.90mの部位に口径12cm×12cmの穿孔、3.65m部位に口径13cm×15cmの穿孔が見られる。

他の西側々壁の穿孔部位から考えて下方の穿孔が横梁を通すために用いられたものと考えられる。

この大石柱の外側3.90m部位の穿孔部直下に39cm×39cm×2.5cmの浮彫りがあるが、これは太陽の如きを象徴したものでなかろうか、この住居地が附近遺跡中最大のもの故、或いは酋長家のシムボルを示していたものでもあろうか。

西側の壁中、地上に姿を留めているものは如上のもの以外になお7例見られる。

東側々壁中地上に姿を示しているものは8例あるも、断絶或は倒壊して完全なものがない。然し倒れているものの中、略々完形を窺える1例について計測するに、現地表からの高さはほぼ4m余を示していたと思われる。その上部に穿孔がなされており、その穿孔部位は東側大石柱の下位穿孔部位に相応する位置を示している。

棟木を支える3本の支柱は両側壁の中間に掘立てられていたことは基部の位置によつて明瞭であるが、総べて倒壊して完全な原形を留めるものはない。然し、少部分の欠落あるも略々全高の推測可能な石柱について計測するに床上より約5.20m余はあつたと思われる。

南北両端の妻壁の部分は材料が失われているが、側壁構造から見て切妻構造をなしていたことは推定出来る。

両側側壁の石材の地下埋積状況を発掘によつて調べて見るに、調査しえた限りに於いては下方は鋭角に両角が截られて造形されている。

側壁にはスレート片を側辺より詰め込み補強せるものが見られるが、側壁造築の技術として注目しておいてよいであろう。又側壁の地下埋立部分に穿孔を有するものも見出される。地上上端に近い部位に穿孔を有すると同時に地下埋立部分に穿孔を有する例も見出される。下方を鋭角に造形したのは側壁を掘立てる上に作業を容易ならしめるためのものであり、穿孔は石材運搬の際に綱材を通すためになされたものであろう。日本にもその風があつたことは「石山寺縁起絵巻」に建築用の巨材を牽くのに一端に孔を穿つて綱で牽いている図があることでわかる。然し石壁上部の穿孔は運搬の際にも利用されたであろうが、横木を通すための構造と考えられる。

なお東側側壁外側には大型円礫を堆積配置したと考えられる構造が見られる。

家屋正面はこの円礫構造部位に面して平入構造をもつたものでないかと思うが確認は出来ない。然し側壁の一部に入口部位でないかと考えられる構造が見られる。然し側壁の欠落が所々あるために入口が幾ヶ所に構造されていたかは不明である。

なお側壁及棟木支柱の倒壊方向を見るに、東側或は東北側え倒壊せるもの、側壁3、支柱1、西側及び西南側え倒壊せるもの側壁1、支柱2、その他といえども悉く地表上部分が切断されているが、石材の所在は不明である。然しこれらの石材は発掘が更に完全に行われた場合

に発見される可能性はあると思われる。

屋根を葺くに用いたスレート片と思われるものは全然発見されないので屋根はおそらく茅で葺かれていたと考えてよいであろう。

室内の部屋割構造は我々の発掘では明にされなかつた。又器物の配置状況も漂石漂土のために位置を変えているから不明であるが、少からざる石杵が室内部分に於いて、発見されたこと及び中央室内床上より良質の鼎型土器、黒陶質土環、石鎌、石庖丁の類が発見されたことは興味深いことである。漂土漂石に混じて発見された土製遺物は壺型土器片を主体とするが、珍しい例としては穿山甲を模したと思われる土偶が1例発見された。

六 遺 物

ほぼ20cm前後の厚さを示す最上漂土層（第2次堆積による）中にも赤褐色粗面の土器破片が見られるが、遺物は主として最上漂土層下の漂石と混在して見出された。

【一】 土 器

土器は粗面の赤褐色土器を主体としているが微量の赤褐色磨研の紅陶系土器も見出され又、微量の黒陶系土器の残片も発見された。

〔1〕 赤褐色粗面の日常用土器

胎土中には砂粒を含み、器面は磨研が加えられてなく粗面のままである。この赤褐色粗面土器のあり方は小形の祭祀用容器と思われるものを除くとみな断片である。

(A) 外反口縁を有する土器 完形品はないが、此の種の口縁を有するものは鼓胴の壺形土器であつたと思われる。発掘によつてえられたもので口縁部復原可能なものは全部で10例に過ぎない。他の部分に比して最も毀損し易い部分であるためであろう。口縁上端にて口径を計測するに最大22.6cm最小5.4cm。(Fig. 3参照)

(B) 高台形式の底部 発掘によつて得られた高台形式の底部と判断出来るものの断片は124片に及ぶが、その中復原可能な標品8例、その中、3例について実測図を掲げた。大形のものでは高台底部接地面に於いて直径34cmに及ぶものもある。この形式のものには良質磨研の小形のものもあるが、粗質大形のものは何れも据置き貯蔵用壺器と考えてよいと思われる。高台接底部に近く穿孔を有する例も見出される。

アミ族のデワス系土器が、外反形式の口縁を有するものに限つて高台を有することよりみて、外反形式の壺形土器の中に高台を有するものがあつたのではないかと考えるものである。

(C) 外反口縁を有せぬ壺形土器 口径6cmのもの1例、口径20.2cmのもの1例、計2例が得られたに過ぎない。

(D) 鉢形土器 鉢形土器口縁部と思われるもの26片が得られたが、その中5例について復原図作成が可能であつた。口径最大なるもの27.6cm最小のもの15.2cm。(Fig. 7参照)

(E) 蓋 略々器形の復原可能なもの5例、その他断片23片に及んでいる。然して形態的に見ると橋梁状把手を有するものが大部分にして、つまみ状把手を有するものは1例に過ぎなかつた。器形から見て、外反口縁を有する壺形土器の口蓋と考えられる。(Fig. 4, No. 1, 2参照)

(F) 把手 完形品6例、断片176片、いかなる把手が如何なる器体のどの部分に附せ

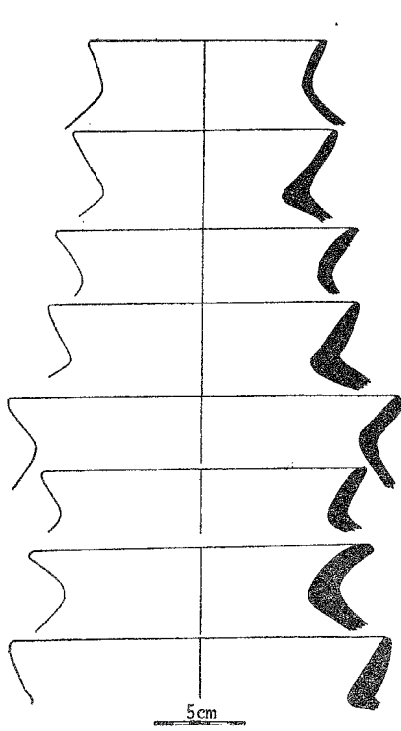


Fig. 3. Mouthpieces of short neck curving outward.

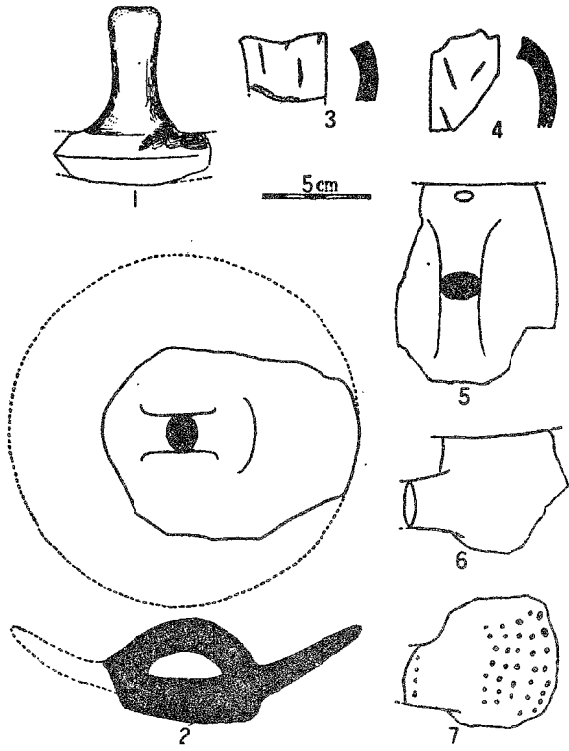


Fig. 4. Lids and handles.

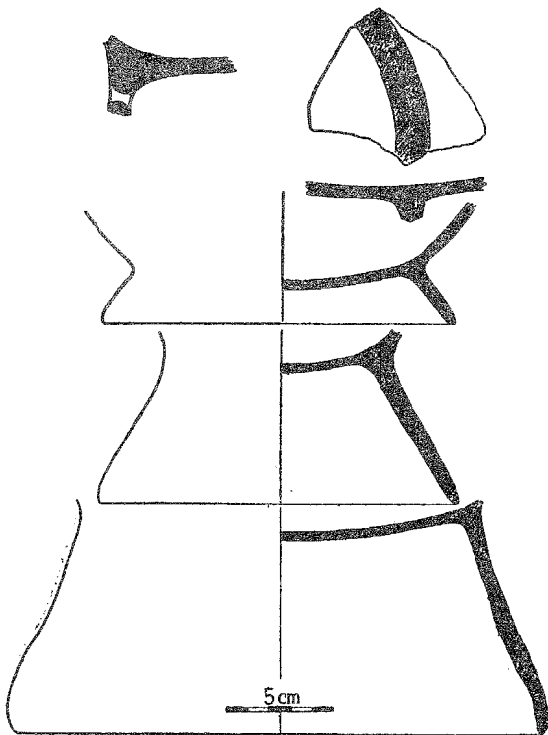


Fig. 5. Rimmed bottom-parts.

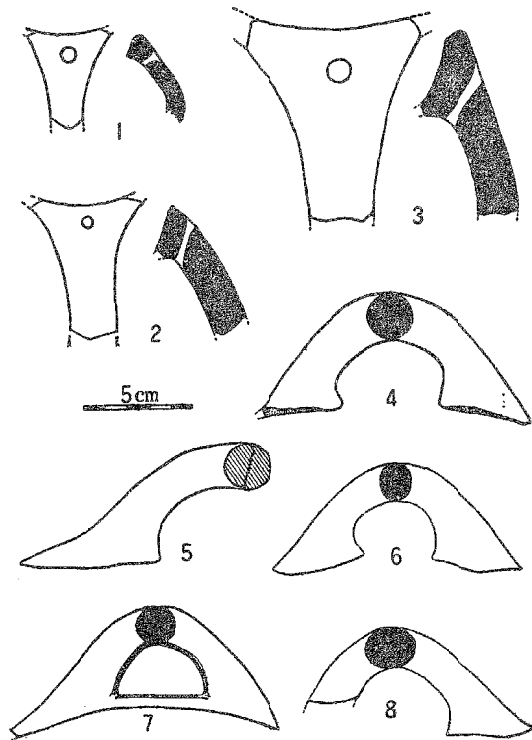


Fig. 6. Handles.

られていたかは完形土器がないので確実にはされていないが、大体に於いて3形式の種類があったと思われる。

(a) 外反口縁を有する壺形土器の口縁部から胸腹部へ縦に附せられたもの。この種のものとは比較的薄手、幅広の把手にして器面に、状の陰刻を有するものと、厚い断面を示し器面に陰刻を有せず、口縁部との連絡部近くに縦に穿孔を有するものがある。この縦形式把手を有するもので、口径の復原出来るもの3例について復原実測するに、9.8cm, 11.9cm, 13cmの口径を示した。(Fig. 6. No.1—3)

(b) 鼓胴の壺形土器の腹辺両側に水平に附せられたと考えられるもの (Fig. 6. No. 4—8)

腹辺の把手接着部の復原せる器胴の広さは最小31.8cmから最大50.2cmに及ぶものが普通である。この横耳形式のものは頭上に載せて両側の横耳を手にて抑えて飲用水の運搬用に供される場合もあったと思う。紅頭嶼ではこの横耳形式の土器に飲用水を汲み頭上運搬する例が見出される。

以上の中、橋梁状形式の把手は花蓮港市花岡山及び円山出土品中に見出される。横耳形式把手は東海岸先史遺跡に広く見られると同時に、アミ族、ヤミ族の現行土器中に見出される。

〔Ⅱ〕 供献用と考えられる土器

大形容器に比して、日常使用に供されたとは考えられぬ小形容器がある。祭祀用供献用として使用されたと考えられるものである。

(a) 赤褐色粗面デウス類似土器

7例中底部によつて分類するに糸底を有するもの3例、平底のもの4例、器形は洋式の盃形のものが多いが、両側に把手を有する複雑な器形を示すものもある。この種小形容器はアミ族のデウスに容易に類形を見出すことが出来る。(Fig. 9,

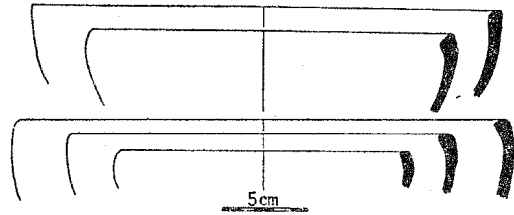


Fig. 7. Mouthpieces of bowl-shape potteries.

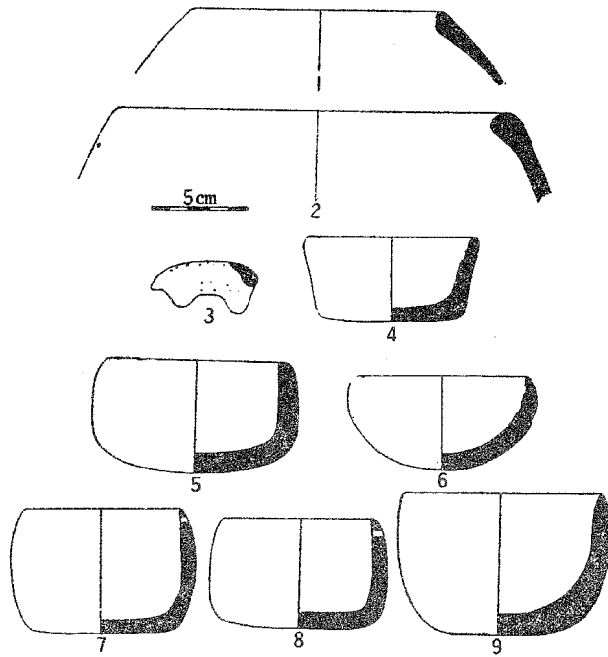


Fig. 8. No. 1—2 : Mouthpieces curving inward.
3 : Animal figure.
No. 4—9 : small vessels.

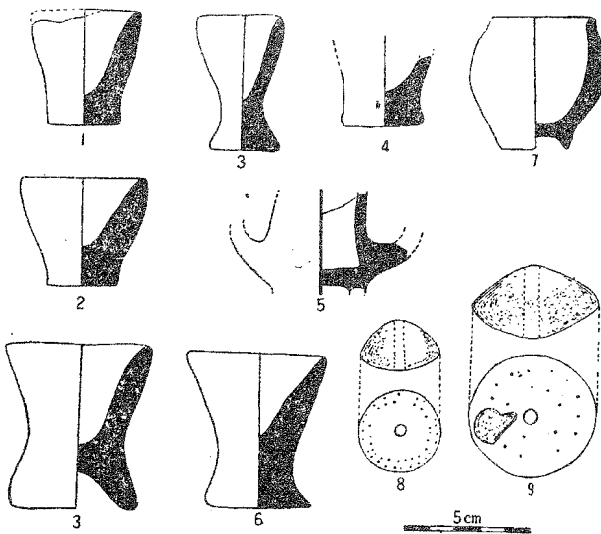


Fig. 9. No. 1—7 : Small vessels.
8—9 : Spindle whorls.

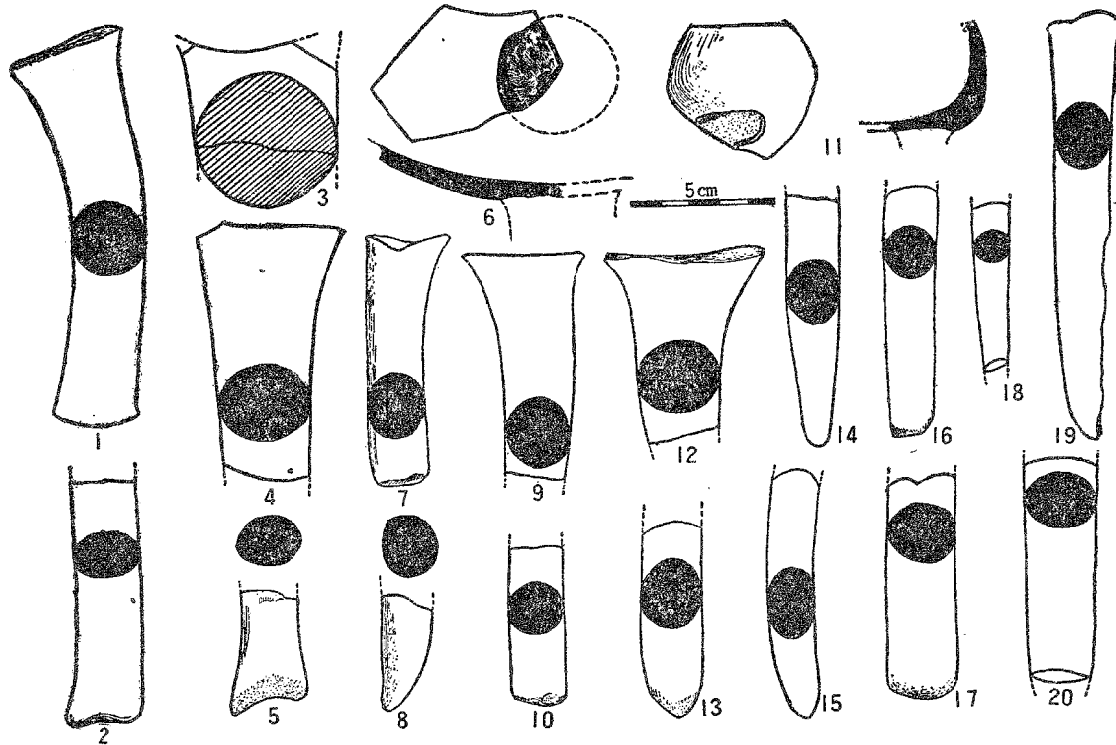


Fig. 10. No. 1—5, 7—10, 12—20 : Legs of tripod potteries.
6, 11 : Bottom parts with wrenched leg mark.

No. 1—7, PL. III 8—11. 参照。但, PL. III 12—14 にはアミ族の祭具デワスを掲げた。

(b) 小型碗形土器 復原可能なもの5例。その中2例は口縁に近く穿孔を有している。口縁に穿孔を有するものは紐にて吊すようにして使用されたものであろう。アミ族の祭器中には紐を附して用いるものがある。(Fig. 8, No. 4—9, PL. III—16)

(c) 赤褐色粗面鼎形土器 鼎脚と考えられるもの21例, 鼎脚の脱落せる痕跡を鼎底に有するもの2例ある。以上によつてもわかるように鼎形土器が豊富に存在している。鼎脚より見るに相当大形の鼎形土器の存在が考えられる (Fig. 10)

(d) 磨研紅陶質鼎形土器 磨研紅陶質の小形鼎形土器は住居床面より1例得られた。脚部は欠落しているが器底に明瞭に欠落痕を留めている。器面には赤褐色顔料が塗彩されている。(Fig. 10, No. 11, PL. III—15)

(e) 絲底を有する磨研紅陶質土器 良質の磨研紅陶にして, 絲底を有する小形土器が住居床面より1例得られた。

〔Ⅲ〕 紡 錘 車

算盤珠形のものにして, 径3.2cmのもの1例, 4.5cmのもの1例, 5cmのもの1例, 計3例が得られた。その中2例は下面に刺突紋を有している。何れも赤褐色にして粗い砂質を混じたものである。(Fig. 9, No. 8, 9は有文例につき図示)

〔Ⅳ〕 土 環

赤褐色良質の土環で内径6cm幅1cmのもの1例, 他に黒陶質のものがあるが黒陶の項に記載する。

〔Ⅴ〕 土 偶

土偶が1例出土している。穿山甲と思われるが尾部が欠落している。体長5.8cm 胴厚2.3cm

×2.3cm, 前脚の幅2.4cm, 後脚の幅2.6cm, 穿山甲は昼は土中に穴居し蟻, 白蟻その他の昆虫を常食としている。体を覆うている鱗片を立てて蟻を捕えるといわれる。土偶には鱗片が刺突によつて紋様化して示されている。肉は美味であるといわれるから捕食していたかも知れない。(Fig. 8, No. 3)

〔VI〕 黒 陶

中室全床面を出すことに成功した際、床上に於いて微量の薄手良質の黒陶小片が得られた。東側々壁下に於いて黒陶質土環1例が得られた。黒陶小片は何れも器壁の小断片にして器形の復原は不可能であつた。黒陶質土環は内径略6cmのものであつたが、標品を紛失してしまつた。これら黒陶の痕跡を通して、西海岸南部に盛行を見た黒陶が東海岸に及んでいることが明かにされた。

【二】 石 器

石器には農耕用石器, 工作用石器, 収穫用及脱穀用石器, 用途不明石器及家畜の飼料容器と考えられるものに分類することが出来る。以下それら用途別に記載しておきたい。なお計測数値は縦は長軸の最長部と幅は横軸の最広部, 厚さは縦断面作成部の最厚部を計測したものである。

〔I〕 農耕用石器

(a) 長目短冊形の打製粗造石鋏 何れも打製粗造, 長目短冊形を示し, 石鋏として用いられたと思われる。

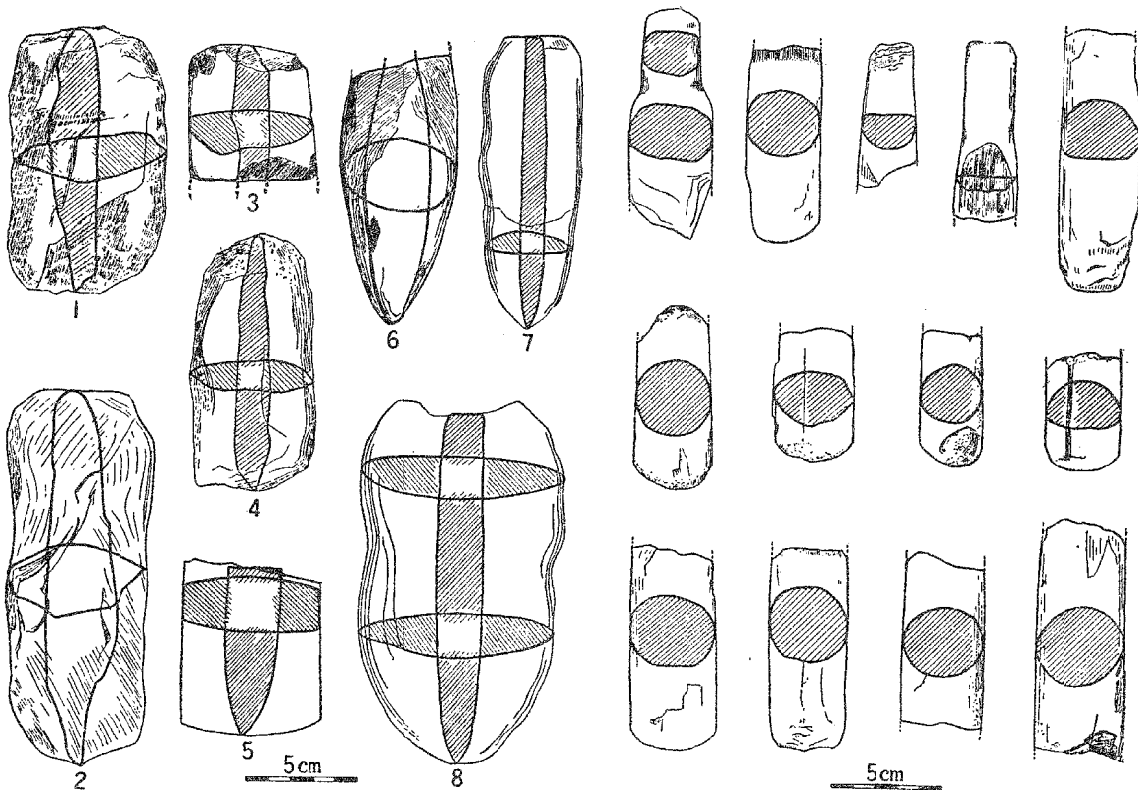


Fig. 11. No. 1—4, 6—8 : Chipped stone implements in sand stone. 5 : Polished axe in quartzite.

Fig. 12. Stone pestles.

- (1) 縦11.5cm, 幅6.5cm, 厚2.1cm, 石質, スレート (Fig. 11, No. 1)
- (2) 縦16.5cm, 幅6.2cm, 厚3.2cm, 石質, 砂岩 (Fig. 11, No. 2)
- (3) 縦 5.9cm, 幅5.4cm, 厚1.7cm, 石質, 玢岩 (Fig. 11, No. 3)
- (4) 縦11.2cm, 幅5.4cm, 厚1.4cm, 石質, スレート (Fig. 11, No. 4)

以上の中第(3)標品は完形品でなく欠落あり断片である。

(b) 鋏形石器

(1) Fig. 11, No. 8 : 標品は最もチピカルな鋏形を示している。恐らく両側辺の凹部は木柄に緊縛するために構造されたものと思われる。縦15.3cm, 幅8.6cm (これは斧口の最大幅) 石質はスレート。

(2) Fig. 11, No. 7 : 標品は幅は狭いがやや磨研を加えて斧口を形成している。側部には木柄に緊縛するための僅かな加工がなされている。

(3) Fig. 11, No. 6 : 標品は幅狭く且つ先端部を尖形に造形しているが、厚味があり、がっちりした器体を示している。石質は堅硬な大理石を用いている。土掘用具であろう。縦11.3cm (但し上部欠落) 幅5.1cm, 厚3.1cm。

〔Ⅱ〕 工 作 用 石 器

(1) Fig. 11, No. 5 : 標品は一部に打痕を残しているが大部分は美しく磨製されている。灰色の緻密な石質, 結晶片岩系石材と考えられる。両刃形式を示しているが、一面は微弱に、一面はやや著しく刃部形成がなされている。厚さもあり重量もあるので木工用かと考えられる。

(2) 土器製作用石器—土器製作のために使用されたものと考えられる扁平円礫及び球形の礫が出土している。前者は径6.9cm厚さ4.4cm。後者は径6.9cm—7.1cm, ほぼ球形。扁平の円礫は現在アミ族, ヤミ族にあつて土器製作に際して側壁を形成する際に器体内側より圧錘として使用されている。球体を同様に器形形成に使用する例はツオウ族に於いて知られている。

これらの土俗例より見て、住居址出土の扁平, 球形の円礫は土器製作用に使用されたものと見てよからう。

〔Ⅲ〕 収 穫 用 石 器

(a) 石 鎌

得られたものは3例であるが、それぞれ様式を異にしている。様式の上のヴァラニチイは収穫生活のかなりの時間的経過を物語っているように思われる。

(1) Fig. 13, No. 1 : 標品は器体の基端部に一部欠落があるようである。現状のままで刃長8cm, 幅4.4cm (断面図の部分), 厚0.8cm (断面図の部分), 背部基端部に近く凹所が構造されているのは柄に緊縛する必要からなされたものであろう。石質は硬砂岩 (PL. II a—5)

(2) Fig. 13, No. 2 : 石器の先部に欠落がある。基端部に近く, 穿孔を有し, 柄に緊縛せしめて使用したことを示している。又刃縁には浅いが鋸歯状の刃部構造が工夫されている。現状のままで刃長6.7cm, 幅有孔部に於いて1cm, 刃部の厚さ断面図の部分に於いて0.9cm, 石質は硬砂岩。(PL. II a—4)

(3) Fig. 13, No. 3 : 磨製, 刃部の大部分が欠落している。柄の構造を見るに, 木柄を附せずとも手にてそのまま把持使用出来る程の柄部構造を示している。石質はスレート (PL. II a—3)

(b) 石 庖 丁

(1) Fig. 13, No. 4 : 石質は硬質の砂岩, 磨製, 刃縁に見られる刃こぼれは鋸状を構造させ

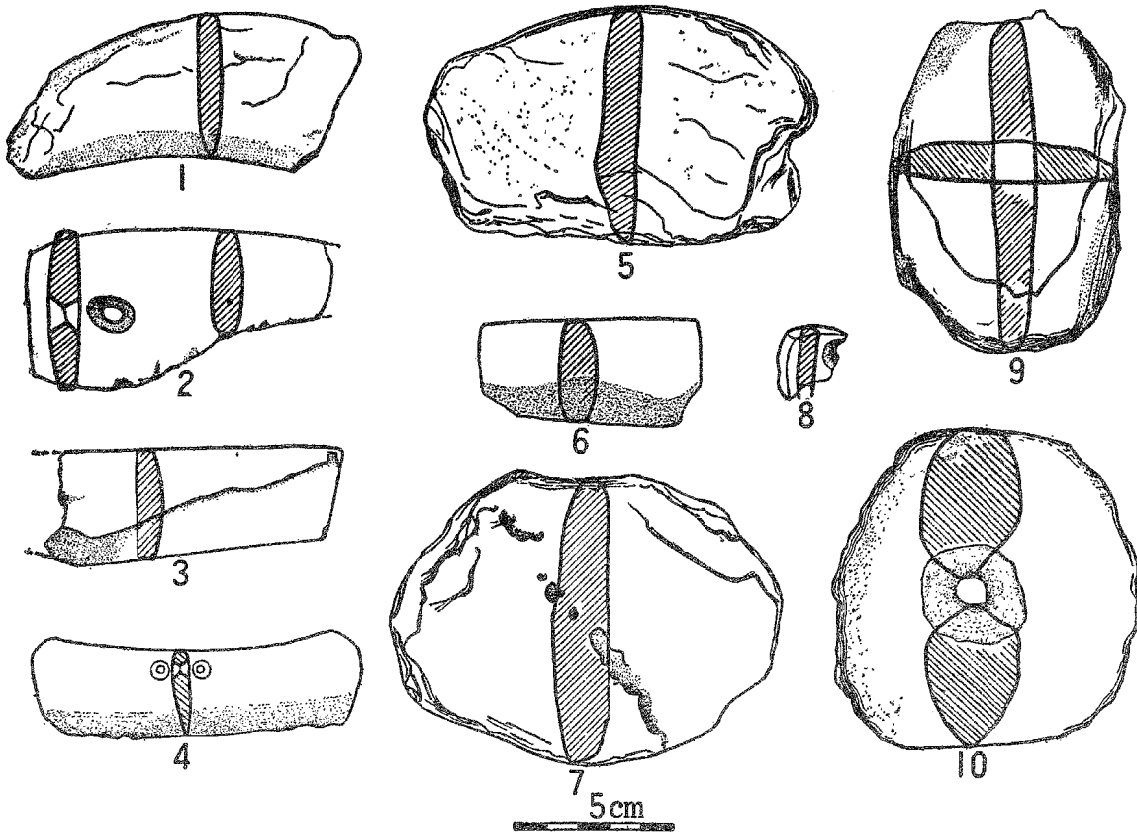


Fig. 13. No. 1—3 : Stone scythes. 4—5 : Stone knives. 7—10 : Stone implements, unaccounted for use.

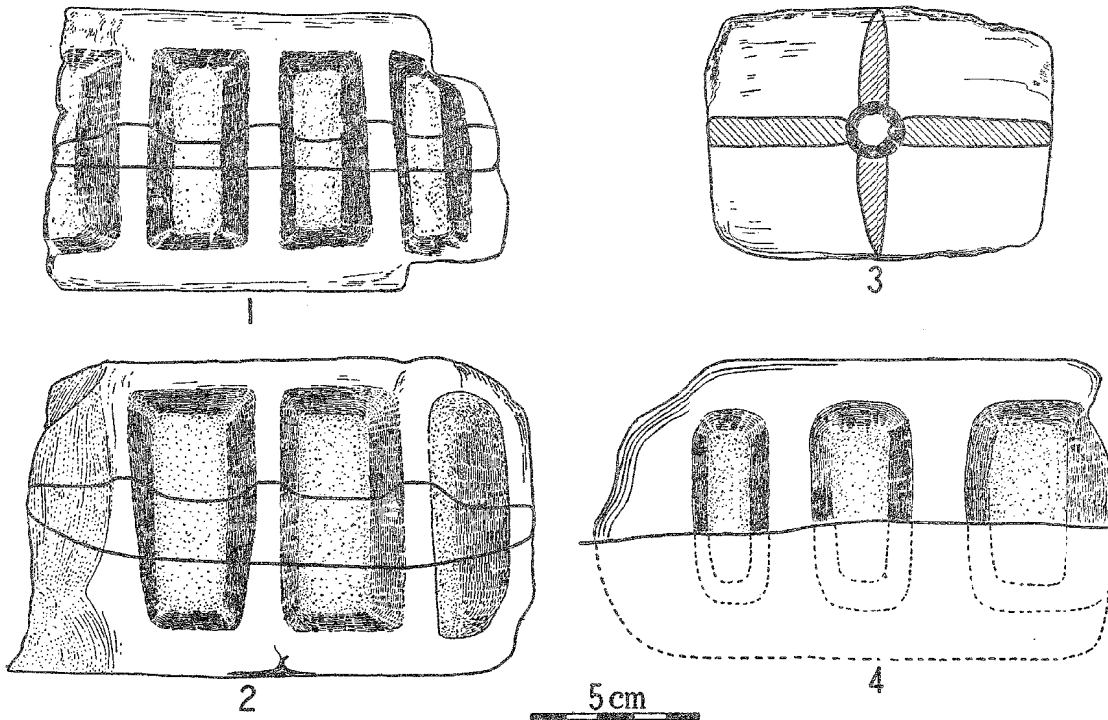


Fig. 14. No. 1, 2, 4 : Stone feeders in sand stone, supposed to have been used for pigs. 3 : Perforated plate in sard stone.

るための加工ではなくて使用痕を示すものであろう。背部は凹形を示し、穿孔は2ヶ所に見られる。(PL. II a—2)

(2) Fig. 13, No. 5 : 石質はスレート、粗造品であるが、背部頂に磨研による器形調整が行われている。右端側部の扶入構造は左端側部の粗い加工部位と対象するもので、背部の被覆物を側部加工部に於いて緊縛したことを示すものであろう。(PL. II a—1)

〔Ⅲ〕 脱穀用石器

硬砂岩を用いた石杵13例が得られた。その中上部の柄との連結部構造を示すもの3例、下部構造を示せるもの7例、首部及び下端部を欠落せるもの3例である。(Fig. 12, PL. II—b)

上部構造を見るに、明瞭に柄に連結するための造形を示している。上部構造のみならず下部形態もアミ族が現在使用している石杵と形態が酷似していることは注目すべきである。現行アミ族の石杵を見るに、柄としては杵部と同質の硬質砂岩を用い、円柱形に造形し、杵部との連結には竹筒を用いて連結せしめ、藤環にて締めているものが見られることよりして、使用法の推測は略々可能である。

〔Ⅵ〕 用途不明石器

(1) Fig. 13, No. 6 : 大きさは6.8cm×3.1cm×1.2cm 石質は砂岩、両面並に上下両側左右両側端ともに研磨されている。刃部は形成されていない。砥石の用途をもつたものではないかと考えるが、明瞭でない。

(2) Fig. 13, No. 7 : 大きさは11.9cm×8.7cm×1.7cm 石質はスレート、周辺に打欠きによる造形がなされているが、明瞭な刃縁の形成は見られない。(PL. II a—6)

(3) Fig. 13, No. 9 : 大きさは10cm×7cm×0.75cm 石質はスレート両側面に略々刃縁の形成がなされている。

(4) Fig. 13, No. 10 : 大きさは9.1cm×9.6cm×3cm 石質は硬砂岩、両面及上下両側に磨研が加えられ、左右両側は打製そのままである。ほぼ中央に両面より加工され穿孔が行われている。

(5) Fig. 13, No. 8 : 石質は蛇紋岩、穿孔を有し小形、美しい石質より見て垂飾の1種であろうと考えるが、破損して全容不明、従つて性質用途も正確には不明である。

(V) 住居址南西端附近に発見された石造物

住居址の南西端は切り取られ、整地されて農家の(上述の園本氏)宅地となつているが、切り取られて段状をなす宅地と住居址との境界に4個の石造物が発見された。その中1例は横立し下半を地下に埋没し他の3例は遺跡出土のものという。我々の発掘を試みた住居址に関係あるものと思われる。3例は容器と考えられ、他の1例は有孔の石板にし完形品であるが用途は不明である。(Fig. 14)

(a) 石造容器 (Fig. 14, No. 1, 2, 4)

石造の容器は硬砂岩を用いたものである。ほぼ方形にして盆形の凹部造形がなされている。おそらくその部分に餌料を入れたものであろう。アミ族、ヤミ族等が豚に餌を与える際に大形の容器を用いることから考えて豚の飼養がなされていて餌を与える際の容器として用いられていたものでなかろうかと推察される。

(1) Fig. 14, No. 4 : 全長151cm、幅86cm、平行に3個の深さ略々7cmの長方形の槽形構造が造形されている。側方を上にして横立し、下半は地下に埋没していた。石質は硬砂岩。

(2) Fig. 14, No. 1 : 全長 134cm, 平行に 4 個の深さ略々 5 cm の長方形の槽形構造が造形されている。石質は硬砂岩。本標品の形態がヤミ族の木製の盆の形に類似していることは興味深いことである。

(3) Fig. 14, No. 2 : 全長 145cm, 幅 92cm, 平行に 3 個の深さ略々 7 cm の長方形の槽形構造が造形されている。石質は硬砂岩。

以上の 1, 2 標品は何れも住居址南西端の切り下げられた宅地境界部に立てかけられ、(4)標品は横立して、下半を地下に埋没せしめていた。

(b) 有孔石板 (Fig. 14, No. 3)

上掲の石造容器と同様宅地境界部に立てかけられてあつたもの。中央に両側よりする穿孔があり、完形品である。住居の施設物の一部をなすものと考えるが、如何なる施設に用いたが不明である。全長 98cm, 幅 72cm, 厚 8.5cm, 石質はスレート。

【三】 鉄 器

住居址発掘中鉄片が 1 片出土した。断片である上に腐蝕が進行しているために、器形、性質が不明である。然しながら、この 1 片の鉄材の発見は、既に鉄器が使用されていたことを示すものとして貴重な資料である。

六 遺物より見た生産状況と生活様相

(1) 農 耕 作 業

生産のための作業の様相を最もよく語っているものは石器であろう。先づ土掘具であるが若干のヴァラエチイが考えられる。短冊形の打製粗造の石鍬は現在山地地方のインドネシア系原住民族の居住地域に発見されるものと同様のもので、石鍬として木柄に附して用いられたものであろうと既に記載した。扁平にして幅の広い鍬形石器は両側にくびれを示し、やはり柄を附したものと考えられるが、土掘用農具としては短冊形粗造石鍬より進歩した形態を示している。植物の根部等の掘鍬に適したものとしては細目にして尖形の石器が見られる。やや薄い形式のものと厚手のとの別がある。植物の種類によつてその適用を考えることから生み出されてきたヴァラエチイでなかろうかと考えている。

(2) 栽培植物について

栽培植物としてなにを作つていたかは問題であるが、収穫用と考えられる石器からある程度推測することが出来るであろう。

石庖丁は穂づみ用具として考えられるものであるが、台湾では現在の山地原住民族が粟の穂を小さな鉄製ナイフで穂づみしているもののあることから見て粟が栽培されていたとみてよいのでなかろうか。

次に石鎌であるが 3 通りの様式が見出されることは、石鎌使用が時間的に見て相当期間なされていたことを物語るものであろう。

住居は石造ながら屋根は草で葺いたと考えられるが、茅草は石鎌では容易に刈取ることは困難であつたのではないか。石鎌の対象となつたものは禾本科の植物でなかつたろうか。それは陸稲ではなかつたろうか。台湾原住民族中稲を早く作つたのは東海岸のアミ族であつた。アミ族は他の原住民族にききかけて水稻を作つているが、水稻作は比較的近代のことであるらしい。

我々の発掘を行つた石柱遺跡地方は水の使用の困難な比較的高燥な土地である。従つて石鎌使用の対象となつたものは陸稲でなかつたらうかと考えている。鎌の普及した時代にも粟は穂刈されているのは粟の藁が利用出来ないからである。石鎌の発達には稲藁の利用が行われるに至つていたことと関係があるのではなからうか。

なお粟稻の収穫と関係をもつて考えられるものに石杵がある。脱穀に使用されたものであろう。石杵の数は比較的多く発見され、それらが石材からみて、又形式からみて、アミ族の現用のものと酷似することは、使用者たちの系統を考える上に一つの手がかりを提供するものである。

以上の農作物収穫用の石器から考え、又漁撈関係の遺物がこれ迄の所、発見されていないことから考えて農耕を主体とした生産に従事していたと見てよからう。

なお大形の石造容器は豚の餌槽と見るのが最も妥当と考えられることから、家畜として豚の飼育が行われたであろうと見てほぼ間違いなからうと考える。

(3) 衣料, 身体装飾, 食生活, 精神生活

紡錘車の存在からして、絲を紡ぐ作業が行われたことが推定される。絲の材料は不明であるが、山地、平地のインドネシア系原住民族にあつて、一般に苧麻が栽培されていることから見て、繊維植物として、早くから苧麻が栽培されていたものでなからうかと思う。

食料としては粟、稲があつたであろうことについて既に想定した。主食としては穀食が行われていたであろうとするものである。

狩猟をを考えると手がかりとなる石鏃は今の所発見されていないが、全く同等の文化を伴いほぼ時代を同じうしたと考えられる都巒遺跡に於いて多数の石鏃が発見されることを見ても、卑南遺跡に於いてもその発見は将来に於いて期待してよいのでなからうか。その肉の美味なことで知られている穿山甲を模したと思われる土偶の存在からして、穿山甲が捕食されていたことを考えさせるのである。

土器の中には把手の性質から考えて、体側に水平に附せられた横耳形把手を有する壺形土器があつたと思われるが、この種のもは頭上運搬に用いられたのでなからうか。ヤミ族婦人がこの種の横耳形把手のある壺を頭上に載せ横耳形把手を手で把持しながら水を運搬することから見て推測に難くない。

鼎形土器、デウス類似の供献用と考えられる土器を通して祭祀の行われたことが考えられる。デウスを祭器として行われるアミ族の農事祭の如きが行われていたものではなからうか。

七 東海岸に於ける先史遺跡との関係

我々が発掘したのは、大石柱を有する遺構の一部であるが、他に発掘地附近の石柱遺構は同様の構造のものであり、表面採集される土器も石器も発掘によつてえられたものと同性質のものであることから見るなら同一集落に於ける遺構と見られる。その先史集落の規模については既にふれたが、更に入念に発掘調査をすすめることが出来たら集落の全貌を再現することが出来るかと思われる。

石柱を有する遺跡は東海岸に限つて分布している。海岸に面した高台や又台東山脈と中央山脈とはさまれた狭長な平地に見られる。その最北の分布地を鹿野博士は、花蓮港鳳林新社とされているが、馬淵東一教授によると、教授は昭和4年秋、水蓮尾一カラン海岸山地にも石

柱が5本あること、Tsvilian 氏族の蕃社があつたと聞かれたということを筆者に教示された。従つて分布の北限は今の所水蓮尾—カロラン海岸山地を考えなくてはならない。然してその南限は卑南遺跡である。その間にあつて、海岸地方に於いては石寧埔、加走湾頭に、台東山脈と中央山脈とはさまれた平地地方にあつてはタバロン、公埔、瑞穂の舞鶴にスレートの石柱遺跡が存在することについて鹿野忠雄博士が報告されている。又「高砂族所属系統の研究」の「バングツアハ族」中の Rarangus 族についての記載中には屢々この種族と関係を有するものとしての石柱遺構についての記載が見られること前述したところであるが、石柱遺構としては鹿野博士のあげられた以外に、大庄、池上間の Tamoromor に2個の石壁が存在し、高さ夫々8尺乃至7尺、幅7尺乃至5尺、厚さ5~6寸乃至4~5寸であつて相並行して立つと記載されている。然して Tamoromor とは恐らく石牌庄に南隣する台地を指すらしいとされている。

然して又この石柱遺跡が墓所としては組合石棺を伴つたものでないかと考えるものである。卑南遺蹟を発掘した際、同遺蹟の山際にスレートの組合石棺が存在することを、土地の人々から聞いた。

「高砂族所属系統の研究」によると猴仔山の Kassasikoran には長さ6尺、幅2~3尺、高さ1尺5寸乃至2尺程度のスレート石が多数発掘せられ、仰臥伸展葬の跡が見られる。猴仔山、加路蘭両社の口述者によればここに居住せる Rarangus 氏族の墓であろうというが、現在全バングツアハ族を通じてかくの如き石牌は使用せられない。又「南勢アミ」で仰臥伸展に近い埋葬法（膝をややまげる）或は仰臥屈葬が行われるのを除けば凡てのバングツアハ族は横臥屈葬である。但し猴仔山、加路蘭両社では嘗て伸展葬が行われたことを伝えて居り、都巒八里芒両社では Managanagai, 「海岸アミ」「秀姑蛮アミ」などで Tsikawasai というのに相当する（呪医の意）に限つて伸展葬を行うといわれているが、これらは横臥伸展であつて、仰臥伸展ではない。それ故かくの如き埋葬法によつては特に Rarangus 氏族と Kassasikoran の石棺とを結びつけることが困難であり、また類似の石棺は東海岸各地に見出されるけれども、まだ充分の調査が行われて居らず、この点について何事もいい得ないのである。但し諸口碑に Kassasikoran の地がこの種族と結びつけて屢々語られていること、各地に残存する石柱(?)石壁(?)または石棺(?)が屢々彼等の住居跡とせられていることなどは注意すべきであつて、或は巨大な石材の使用は Rarangus 氏族と何等かの関係を有するかも知れない。」

以上の「高砂族所属系統の研究」の記載では組合石棺の埋葬法が一般のバングツアハ族（アミ族）のそれと相違することを注意している。然しバングツアハ族の木棺構造は組合石棺構造に相似している。又バングツアハ族の埋葬姿勢にも若干のヴァラエチイがあり、殆んど仰臥伸展に近い埋葬法もあり、伸展葬にしたこともあるとする伝説もあることよりして、組合石棺に見られる仰臥伸展の埋葬法はバングツアハ族系の埋葬法の一形式と考えてよいものであろう。

Rarangus 氏族の埋葬の実態が確認されていないが Kassasikoran の組合石棺が Rarangus 氏族と関係ありとして伝えられていることは有力な手がかりを与えてくれるものとするものである。Kassasikoran の石棺遺跡出土の遺物と卑南住居址出土の遺物とを比較すると類縁性の強い文化であることは両者が関係深い先住民によつて遺されたものであろうとする推定を強めるものである。

墓所は死後の住居であつて見れば生前の住居と何等かの関連をその構造に示すことがあつて

もよいと考えられる。スレートを組み立てて住居を造つたこととスレートを組み立て死後の住居を造つたこととの間には関係があると思われる。卑南石造住居の集落に近い山際に組合石棺埋葬地があるとするのが事実であるなら、石造住居と組合石棺埋葬との関係を示す例として貴重な証跡となると考えられる。

組合石棺遺跡を遺した先住民が、石柱遺跡を遺した先住民と同系或は近縁のものであるとするなら、組合石棺遺跡の分布もこの際注意しておく必要がある。その分布は石柱石壁遺構の分布に比して遙かに広い分布を示している。スレート製組合石棺の東海岸に於ける分布の北限は今の所蘇澳区の新域、南限は大武区の太麻里にして海島に於いては火燒島に見られる。砂岩製組合石棺を考慮に入れるなら基隆湾頭の社寮島に見出される。又、中央山脈以西に於いてはスレート製組合石棺は墾丁及び小琉球嶼、埔里の大馬璘、陸起珊瑚礁を用いたものは小琉球嶼、砂岩を用いたものは中部の竹山区竹山に見出される。

然しなんととしてもその濃厚な分布は石柱石壁遺構と相まつて東海岸に見出される。従つてこれら遺跡を遺した先住民の故郷は東海岸地方にあつたものであろう。然して卑南遺跡はその有力な住居地区をなしていたものであろう。

住居の用材に石材を用いず木材を用いるに至つたものも、墓所のみ往時の習俗を守つてスレート材を用いて構築をなし、そこにこの先住民たちの分布移動の証跡が遺されていると考えるものである。但し北部に移動し西海岸地方に発展したものはその遺跡の上に異系文化と接触交渉のあつた事情を反映している。

北方の蘇澳に於いては、台北盆地系繩蓆紋文化と結合し、社寮島にのびては、Kavaran, Ketagalan 系文化に包摂されている。中央山脈を越えたものは大馬璘に於いて大坵溪伝いに東進した黒陶文化を受容している。又南部に於いては恒春半島西海岸の墾丁に於いて、紅陶を祭器に於いて、黒陶の焼成技術を土環に於いて受け入れている。従つて卑南住居址に於ける黒陶質土環、紅陶の痕跡も墾丁を経由して取入れられたと考えてよいと思う。

八 現存インドネシア系原住民族文化との関連

卑南住居址がいかに東海岸及西部先史遺跡と関連をもつかについては、以上に於いて考察した所である。

次に現存インドネシア系原住民族文化との関連について附説しておきたい。

卑南住居址出土の文化が、現存のインドネシア系原住民族文化に於いてはアミ族（パングツアハ族）の文化との関連が最も考慮に価いすることは、これ迄の記載に於いても略々明瞭であるが、ここでは住居の構造上の比較考察の上から言及しておきたい。

卑南石造住居の構造はアミ族のそれに近似するものをもっている。先づ立地状況が近似している。パイワン族の住居構築の如く、傾斜地を利用し、斜面の高い部分を切り下げる如き工作をせず、比較的平板な地面を選び立地している。次に構造の上から見ると、住居敷地の平面は長方形を示し、棟を支える3本の支柱は両側壁の略々中央部に位置せしめ、両側壁は比較的高い。

又屋根は茅の如き植物を用いたと考えられること等はアミ族の住居に酷似する所である。然してアミ族の住居と相違する所は木柱木壁を用いずして石柱石壁を用いていること、深くはないが、竪穴式構造を示していることである。

アミ族の住屋に次いで近似しているのはパイワン族の住屋である。それはスレートの石柱、石壁を用いている点である。その他では大武区のパイワン族山地住屋の形式に建築地盤を掘り下げて竪穴式にしたものが見出されることをあげておきたい。

パイワン族の住居は屋根を茅葺にしたものもないではないが、一般にスレート葺である。

立地状況が相違することは既に述べた通りである。棟を支える支柱は西側壁の片方（奥の側壁の方）に偏して立てられ、側壁は一般に非常に低く、敷地は、はつきりした長方形を示さず、縦と横との較差は著しくない。

以上の諸点よりすると、卑南石柱住居址の構造はパイワン族のそれよりもアミ族のそれに近縁をもつものだとしなくてはならない。

以上の想定は遺物の上からも傍証出来る。土器の種類、性質に酷似するものがあること、石器に於ける石杵の存在等は明瞭にアミ族系文化なることを示している。これらの事実は卑南住居址が Rarangus 氏族の遺跡として語られていることの意味を裏づけるものであろう。

なお、中国人によつて近世に於いてなされた記載であるが、恒春県志卷二十二に「石屋在羅仏山之陽 旧址二百余間 間高濶皆四五尺 四囲石板内各有穴極深…今石板多為郷民搬去 存者無幾」といい、この部落の旧番「羅仏番」は周囲の住民にきらわれて、埤南に奔つたとある。

これはまことに重要な記載である。その石造住居址は卑南遺跡のそれと酷似している。然かもその住居の住民が周囲の住民にきらわれて去つた所が「埤南」であることは興味深い。同様の石造住居を造つた同系の種族が恒春半島にもいたことが語られている。

九 結 語

かくて総合するなら、卑南の先住者とその系統のものは早くから東海岸に活躍し、同系の一部は北部にも南部にも進出したと考えられる。恒春県志に見える羅仏番の記事は最近世に於ける同系の原住民族の動きを語っている。然して東海岸に於ける彼等の故郷地方にあつては、Rarangus 氏族の如き注目すべき伝承を伝えるものがある上に、一系の関連を有するものの如く考えられるアミ族が現存している。

大武地方にあつては同地方のパイワン族の住居に卑南遺跡で明らかにされた構造に類似の竪穴を有する例が見られることは、同地方がアミ族の土器に関連を有するかに思われる先史土器の見出される地方であるだけに関心をひくのである。

プユマ族は卑南先住人についての知識をもつていたらしいことは、その伝説からも推察出来るが、卑南社の如きはそのかつての先住地を占拠した例を示している。

パイワン族は石造住屋、組合石棺を有することからして、近縁性を思わせるが、組合石棺といても伸展葬の形式を示す長方形のものでなく、屈膝座葬のための方形のもので、屍体の埋葬の方法に相違がある。この点から見ると、パイワン族の文化は東海岸及び南部台湾先住民族のグループとは近縁性をもちつつも、厳密にいうなら別系のグループのものとして考えるべきものであろう。